

もっと知りたい ふるさと

17

倉科の観音様 「倉科女に森男・・・」

こんな諺が近辺で昔から使われており、そこから「倉科美人」などとも言われていたが、これは歴史の事実から生まれていたらしい。

その一つ、倉科の石杭に万葉の歌碑が残されている。「比等未奈乃許等波多由登毛波爾思奈能伊思井乃手児我許等奈多延曾祢」

奈良時代、九州に派遣されていた防人が詠った歌とされているが、この意味は「こんな遠方の地に来ちゃって懐かしい故郷の誰とも会話が出来なくなりました。あ、あの埴科の石井にいる可愛い女とだけはもう一度話をしてみたいものだな」となる。

古代日本語で「テコ」とは美女の事を言い、美男子は「ヒコ」と言った。

二つ目として、平安時代の初期、征夷大將軍「坂上田村麿呂」が信濃にやって来た時のことである。

目的は東北遠征であったが、京都立前に一人の仏師から「この観音像は私の故郷にいた大好きな女性の姿を写した物です。この像は必ず故郷の倉科に安置して下さい」と託されたと言う。

それが妙音寺の十二面観音像であり、だからこの観音様は他の観音様と違って、艶っぽい生き生きとした表情をしているのだ。



五番 倉科 妙音寺

あり、波田・穂高・小川・中条・倉科・森・松代東条・保科と続くので、坂上田村麿呂の進軍経路を克明に残している。

ここから同じ作者の彫り物の可能性も考えられるが、おそらく飛騨から野麦街道を通過し、犀川の岸辺を北上して小松原の辺りで南東に進路を変えたと思われる。

そして松代の岩野で千曲川を渡り倉科に到着した。その旧赤坂橋の北側に大日靈貴が鎮座する伊勢社も「大同三年（八〇八年）坂上田村麿呂が・・・」と言い伝えられているから、この可能性は高い。

大日靈貴とは天照大神の別

名である。

岩野から峠を越えて倉科と森に観音像を奉安した後、再び峠を越えて東条に行き、保科から嬭恋か渋峠を越えて東北へ行った。

これが坂上田村麿呂の信濃通過経路であるが、飛騨から群馬へ行くとすれば上田・真田・嬭恋のルートが一番の近道なのに、なぜ犀川を北上する遠回りの道を選んだのか。

その理由が信濃三十三番札所五番の妙音寺に安置された観音像にあったとすれば納得できる。

だが、六番の森にある観音寺に千手観音像が奉安された理由は何なのか。それは未だ解明されていない。

屋代 近藤 修



妙音寺の観音様

この二つの出来事から昔の人は「倉科女・・・」と語っていたと思われる。

坂上田村麿呂に関係すると言われる観音堂は信濃三十三番札所の中に八カ所



六番 森 観竜寺